

「チロ工島で農協設立、地産地消を目指して」

地球の反対側、朝晩も季節もまったく逆のチリへ、日本女性が青年海外協力隊員として派遣された。坂本千尋さん、27歳。地元農産物の販路拡大、農業活性化を目指して、女性生産者たちと農業共同組合を立ち上げ、地域を駆け回っている。



アグリ・ケジョン組合の長であるサンドラさんとスーパーで。レタス袋は坂本さんのデザイン

文・写真=すずき ともこ(フォトエッセイスト)
text and photos by Suzuki Tomoko

会社員から 青年海外協力隊員へ

坂本千尋さんは、2005年から村落開発普及員という職種で、チリ第10州チロ工島のケジョン区、役場管轄の企画課で働いている。日本にいたころ彼女は、航空会社に勤める普通の会社員だった。「そのころは、私の人生が今のように責任あるものになるとは思いもしませんでした」と言う。

彼女は仕事をしながらネパールを支援するNGOの活動に携わるなど、海外には興味があつた。そして自分がボランティア

で何か役立ちたいと、退職を決め、青年海外協力隊に応募した。

合格後、語学研修などを終えてチリに赴任したが、現地側の受け入れ体制があまり十分ではなく、坂本さんとともに活動するカウンターパートが不在になり、「この先どのように村落開発普及員という任務を果たせばいいのだろう」と悩んだという。2年間しかない任期だ。時間は無駄にできない。

坂本さんの活動は、主に地元農産物の商品化および販路開拓。大きくはケジョン区全体の農業活性化を目的とする。若さ溢れ、果敢な行動力が持ち味の坂本さんは、ケジョン区の状況を知るために、市場調査や農家の訪問を重ね、人々の生の声を聞いた。島の農村はバスを乗り継いでもたどり着かず、最後は歩くほかないような辺鄙なところが多い。人々と話し自分の目で見ることによって、ケジョン区には農産物を商品化するための組織が存在せず、人々はその日に収穫した作物を不定期に小さな市場の一角や道端で直接売ったり、地元の八百屋へ個人的に卸したりして生計を立てていることが分かった。そのような状況で、

生産性の高い農家の人々は農産物を持って余すことも多く、安定した販売経路と市場が必要であることがすぐ飲み込めたという。

坂本さんが動き始めると、市場とは別に、8年前に建てられた農作物や海産物の直売所の再活性化を、という相談が役場から持ち上がった。立地条件の悪い直売所の客足はまばらで、住民の目を引くため「何か新しい呼び物が必要」との声もあがる。そして坂本さんが指揮を執り、和食紹介イベントを開催することになった。その後、地元食材を使った伝統料理も加えて7回ほど継続している。イベントは住民の足を直売所に運ばせる絶好の機会となった。

失敗は許されない 女性農業共同組合

日ごろの地道な活動に加え、イベントを通じ坂本さんは人望や人脈を豊かにしていった。けれど彼女の仕事はイベント企画の文化交流ではなく、地元農家



今日の納品品目は、レタス50玉、パセリ20束、シラントロ(香草)50束、芽葱50束、アセルガ(葉野菜)20束。すべて問題なく買ってもらえた

の経営改善である。それに応えるようケジョン女性を支援する農協を立ち上げた。

坂本さんは、農産物の販路開拓のため、06年5月末に「アグリ・ケジョン」を結成。それは地元農家18人、全員女性の組合員で構成された。商店など特定の売り場を持たず、八百屋やスーパーなど直接契約のみが販売ルートで、女性生産者が安定した収入を得ることを目的としている。

坂本さんは、生産者でもある組合長のサンドラさんと力を合わせ、組合員と何度も会合を開き、共に組織づくりに励んでいる。また、さまざまな手続きを踏んで、地産地消を目指し、大型スーパー(格安野菜を取り扱う巨大資本の店舗)ともやり



早朝、取れたての野菜を地元の大型スーパーへ納品しに行き、スーパーの主任と倉庫の入り口で納品確認をする農家の女性と坂本さん。ビニール袋へ野菜を入れ、ケースに並べた後、明日の注文を確認する。バスを乗り継ぎ数時間をかけて町までやって来る農家もあるそうだ



Sakamoto Chihoro

青年海外協力隊

坂本 千尋

挑戦者たち
Stories of
Challengers
Vol.21

チリと地元兵庫の消防団を結ぶ

チリの消防団はボランティアだ。彼らは日常それぞれの仕事をしながら生活しているけれど、町中にサイレンが響き渡るとすぐに走って消防署へ向かう。そして愛する自分の町のために、消火活動だけでなく交通事故やそのほかの緊急事態にも出動する。

そんな状況下で頑張っている人々に心を打たれ、坂本さんは出身地の兵庫県加古川市の消防団に連絡を取り、中古の防火服、ブーツ、ヘルメット、手袋を譲ってもらうことに成功した。

約30セットがはるばるチロエ島までやって来る。坂本さんは以前、消防団の活動に特に気を留めていなかったが、今では行く先々の町で消防車を見るたびに親近感がわいてきて「頑張れ」と心の中で叫んでしまうそうだ。

そして気になる輸送費は、必死の坂本さんの呼び掛けにより、JICAの「世界の笑顔のために」プログラムが協力してくれることになったという。



伝説や民族文化の宝庫といわれるチロエ島。そんな伝統を重んじる島の人々の中で新しい活動を起こすのは至難の業だが、島民たちの笑顔のために思うと活力がわいてくるという

私の人生が今のように責任あるものになるとは思いもしなかった

現地に密着し、このように一生懸命活動に励む坂本さんだが、「自分はまだまだ未熟で力不足のことがあり過ぎる」と言う。休みみのはずの週末も返上して、彼女はまた回れていない、遠く離れた組合員の農家を一軒一軒訪問し続けている。また、JICA 専門家の仕事場へ行って、先輩たちがどのように現地に貢献しているのかを勉強し、自分の活動を話してアドバイスをもらうこともある。

坂本さんは日本から飛行機を何回も乗り継いで来なければならぬ、遠いチリの島へやって来た。これは彼女にとって命懸けの決断だった。坂本さんの母親は心臓が弱く、病気が悪化したときすぐに駆け付けられる環境ではないからだ。彼女は大切な母のためには、仕事を中断しすぐに帰国する決意を持っていた。だから一日一日がさらに大切に、仕事には手を抜きたくないという。

イベントのポスター、野菜を保護するビニール袋、農協の名刺など、何から何まで自分でデザインし、材料も自分の足で探してコスト削減に努める。インターネットや役所の資料を読みあさり、政府やNGOなどの譲与金募集（競争率が大変高く難しい）に積極的に応募して、農協運営の財源を確保しようと駆け回る。まずは坂本さんが見本を見せて動き、基盤をつくらなければ、ケジメ農村地域初の農協はなかなか機動しないだろう。彼女は短期間に努力と熱意でチリ人顔負けのやり手指導者に変わっていった。



坂本さんのオフィスは古びた役場別館の一角、数人の役場のスタッフと一部屋を共有している。店回りのほか、書類を読んだり作成したりと彼女は毎日休む暇もない

一日一日を大切に

取りができるよう整えた。これによって、現在着実に売り上げを伸ばしている。「農産物をスーパーなどにも買ってもらうには、まず正式な生産団体として都市の役所に登録する必要があります。また納税局に登録して国で発行する正規の領収書も取得しなければいけません。その手続きが並の苦労ではないんです。チリの法律に精通している協力者は身の周りにいませんし、自分で理解するために大量の商業法関係の資料を精読する必要があります。また、何度も追加書類を持って遠方にある役所を往復する上、プレッシャーをかけて仕事を早

めてもらわないと正常に事が運ばないのです」。坂本さんは南米という土地柄で文化習慣とも日々戦っているに違いない。現地の人々はおおらかで明るく、友達を大切にするので付き合いやすいが、ビジネスは別だ。「グループで運営することの利点をしっかりと説明する必要もありました。彼女たちは、個人で好きなときに好きなだけ、好きなように販売していたので、ルールや時間の厳守という観念がありませんでした」

今では現地の大型スーパーの野菜売り場に一角を構える女性農協だが、実は一度販売中止になったことがある。それは女性が暮らす農村で長老が亡くなったときだ。村全体が仕事を禁じ3日間喪に服す風習があり、せつかく軌道に乗ってきた事業が滞る危機が訪れた。坂本さんは納品してもらえないかと村へ説得しに行ったが、伝統を変えろことはできない。翌日、スーパーの主任から納品を断られたのだ。その後、彼女は毎日一人でスーパーに足を運び、10日以上もかかってやっと社長を説得し、納品再開にこぎ着けたという。

「これは私が言い出した農協づくりなので途中で投げ出すことはできません。それに一番怖いのは、お金と農民一家の生活がかかっている真剣なプロジェクトだということ。失敗は家庭をつぶしてしまう。絶対に失敗は許されない責任があるんです。任務はボランティアとは思っていません。仕事としてやらせていただいています」



役場の警備員に追い払われながらも路上で野菜を売る人。以前、女性農協の人々もこのように安値で路上販売をしていたという

また、自分より年上の人々（時には自分の母親と同じ世代）と家族のように親しく接し教えるもらっていたことが多かったのに、ビジネス関係上、立場が逆転するような事態で自分が厳しく指導しなければならなくなったこともあった。それでも彼女たちが理解に苦しむ商品の出荷基準や納品の時間厳守の観念を根気よく言い続け、自らの動き姿を見せることで少しずつ働きぶりに変化が見られるようになった。そして何より、実際に収入を得ることに彼女たちは喜び、納得していったのだ。

坂本さんは組合員との会合で、納品するときの野菜の長さや大きさ、束ねる量なども細かく説明して質の均一化を指導したり、野菜の成長に応じ各農家の収穫時期を振り分けて、皆が平等に出荷できるよう調整したりと工夫を凝らしている。また早期、役場に出動してあいさつするとすぐにスーパーへ向かう。その日の納品個数を確認し、売れるよう店頭で商品の並び替えをする。そして、一日数回スーパーに出向いて在庫数の確認をし、積極的にスーパー主任に足りなくななりそつな産物を売り込む。



大型スーパーには、チリ本土から大量に輸送されてくる激安の商品が並び、その一角でアグリ・ケジメの地元野菜の販売が始まった

Sakamoto Chihiro

さかもと・ちひろ 青年海外協力隊村落開発普及員。1979年兵庫県出身。大学卒業後、航空会社に勤務。その傍らネパールの山村地域での初等教育普及を目的としたNGOで活動を始める。また大阪に事務所を持つNGO「アジアボランティアセンター」にてセミナーなどに参加。2005年青年海外協力隊に応募、退職参加。任期は07年11月末まで。